



科学者の美学

●
本多健一 Kenichi HONDA

日本化学会元会長



科学技術の一端にかかわって年月を過ごしてきた。これを^{なりわい}生業としてきた者として^{じくじ}忸怩たる思いの“こだわり”もある。それは自分自身で完全には納得がいったわけではない事柄でも納得したことにして、世の中で振る舞ってきたことである。自省を込めてそのいくつかを記す。

1. 科学と人間

宇宙の真理、法則は時空を超えて人間の存在などとは無関係に厳然として存在するものと考えられている。しかし一方において科学は人間が考え出し表現したものである。その意味において真理も法則も人間の作り出したものである。したがって人間が科学の主人公であるとする考え方がある。

私は初めは議論の余地なく前者の考え方が正しいと思っていた。しかし次第に後者の考え方に共感を覚えるようになってきた。事実、科学技術の進歩によってもたらされた人類の福祉の向上は計り知れないものがある。このことは明らかに人間が主人で科学技術が僕であることを示している。

さて、一方において科学技術の暴走が人間社会の前途に大きな暗雲を呼び、科学倫理のコンセプトが強く叫ばれるようになってきた。科学技術が僕であるという考えの行き過ぎであり、人類は傲慢に過ぎたと言わざるを得ない。主人公である人間の中で社会の調和と倫理が置き去りにされた結果であり強く自戒しなければならない。

2. 知性と感性

人間の知性は客観的、普遍的で感性は主観的、個性的である。科学は知性により、芸術は感性により生まれるものと普通は捉えられている。

しかし先に述べたように科学の主人公は人間であり、科学が人間の自由な精神の創造性により生まれるものであるならば知性と感性の総合的シナジーによる結果と考えてよいであろう。ノーベル賞受賞者 R. Hoffmann 教授の“Chemical Beauty”と題する講演を聴講する機会があった。科学と芸術、知性と感性の内面的表裏一体は、すでに多くの碩学の言われているところであり強く共感を覚える。

無限の宇宙におけるただ一点に過ぎぬ人間、永遠の時の流れの中の一瞬に過ぎない生命を思うとき、誰でも宇宙の神秘の前に壮大なロマン、未知への憧憬を覚えるであろう。この感動が創造への原動力である。

3. 教育と研究

教育機関に籍を置いてきた身として教育と研究の不可分は絶えず主張し続けてきた。良い研究を行える人にして初めて良い教育ができることは私の確たる信念である。しかし現今の知識情報伝達に過ぎない大学教育システムにおいては実は疑問に思わざるを得ない。研究者育成の教育は別段ノウハウの伝授ではない。研究への情熱、好奇心、想像力、執念、ロマン、観察力、等々あらゆる人間性の複合したものが研究の達成につながる。したがって研究教育は全人格的教育でなければならないと思う。つまり人間的触れ合いがなければならない。昔の Meister 育成、Bauhaus の教育様式等が想いに浮かぶ。

初めに記した“こだわり”を願望と反省を込めて美学と呼ばせていただいた次第である。

© 2009 The Chemical Society of Japan